

幼児の仲間関係に関する研究

— 仲間内地位と教師による社会的スキル評定との関連 —

前 田 健 一

(幼児心理学研究室)

(平成2年10月11日)

子どもの行動に関する問題は、望ましい行動が欠けているか、望ましくない行動が過多であるか、あるいは何らかのハンディキャップ条件が組み合わされているかのいずれかである場合が多い (Herbert, 1986)。社会的に望ましい行動と望ましくない行動は、どちらも社会的学習経験の結果であるか、社会的学習経験をしなかった結果であると考えられる。読み書き計算や交通ルールの遵守行動などのスキルや行動は、一般にそれを学習し達成することが望ましい。その意味で方向性のある明白なスキルや行動といえる。それに対して、未知や既知の人と出会い、会話し、親交を深め、友人をつくり、グループに適応し、その他様々な対人的相互作用を円滑に行うことは、人の社会的適応や人生にとって重要な役割を果たすものである。しかし、こうした社会的スキルは、相手や社会的状況など種々の要因によって変動するだけでなく、欠損も過多も問題を引き起こすことがある。適切なレベルを判断し、調整し、維持することはなかなか難しい。多様な要素から成り、しかもそれぞれのレベル、性質、タイミングなどが重要であるために、子どもに適切な社会的スキルを教えることは容易でないし、その獲得や適用にあたって多様な社会的学習機会を必要とする。

社会的スキルは、子どもの仲間関係の中で学習されると同時に、仲間関係に影響を及ぼす。子どもの仲間関係に関する研究によると、一般に人気児は友好的で肯定的な仲間相互作用を多く示し、拒否児は攻撃的で敵対的な対人的行動を示しやすくと報告されている (Hartup, 1983 ; Hartup, Glazer, & Charlesworth, 1967 ; Gottman, Gonso, & Rasmussen, 1975)。また、仲間内地位の異なる子どもは、進行中の仲間遊びへ加入する仕方にも相違があると報告されている。例えば、仲間内地位の低い子どもは、仲間遊びへ加入する際に仲間の注意を自分に引きつけて、進行中の仲間遊びを妨害する自己指向的加入方略を使用する傾向にあり、そのため加入するまでに多くの時間がかかり、加入申し込み回数も多い。それに対して、仲間内地位の高い子どもは、進行中の仲間遊びの共通目標や遊びの枠組みを確かめたり、集団指向的な言語表現や仲間活動の模倣などを通して、仲間と自分との共有世界を確立しようとする。そのため、仲間遊びへの加入がスムーズであり、加入を拒否されることも少ない (Dodge, Pettit, McClaskey, & Brown, 1987 ; Putallaz, 1983 ; Putallaz & Gottman, 1981 ; Putallaz & Wasserman, 1989)。仲間からの人気や受容は子どもの性別、年齢、身体的魅力度などによっても影響される (前田, 1989 ; McConnell & Odom, 1986) が、上述の研究結果は仲間からの受容や拒否が子どもの対仲間行動の不適切さや社会的スキルの欠損の結果である可能性を示唆している。

こうした可能性を直接検証する1つの方法は、社会的スキル訓練研究である。研究者たちは、仲間受容を高めると思われるいくつかの社会的スキルを子どもに教える介入プログラムを開発

し、仲間受容や対仲間行動の改善に及ぼすその効果を検討してきた（例えば、Bierman & Furman, 1984 ; Ladd, 1981 ; Oden & Asher, 1977）。最近、Mize and Ladd (1990) は幼児を対象として、仲間受容、社会的問題解決知識、社会的スキルの使用などに及ぼす社会的スキル訓練の効果を検討している。その結果、スキル訓練グループは、訓練前から訓練直後にかけて仲間相互作用の中で社会的スキルを多く使用するようになり、社会的問題解決知識にも有意な増加が認められた。それに対して、仲間受容は訓練前から訓練直後への増加が認められず、それから約1か月後のフォローアップ査定時点でようやくその改善効果が現れていた。この結果から、Mize and Ladd (1990) は、ある幼児の対仲間行動に変容が起こっても、仲間がその幼児の変容に気づき、仲間が受容するようになるまでには時間を要するのではないかと示唆している。

社会的スキル訓練研究は社会的スキルと仲間関係との関連について理論的にも実践的にも有望な知見をもたらしてくれるが、まだまだ少数の標的スキル行動しか扱っていない。どのような社会的スキルが仲間内地位と関連しているか、社会的スキルの種類や性質についてもっと詳細な情報を収集していく必要がある (Kurdek & Krile, 1982)。本研究では、幼児を対象にして、仲間内地位（仲間情報）と担任教師による幼児の社会的スキル評定（教師情報）との関連を検討した。仲間内地位は2回の写真ソシオメトリックテストによって決定し、幼児の社会的スキルは肯定的発言、否定的発言、要求・指示、会話、感情・共感の5領域にわたって評定してもらった。社会的スキル評定と第1回目の写真ソシオメトリックテストはクラス編成から約3か月後に実施し、それから4か月半後に第2回目の写真ソシオメトリックテストを実施した。Mize and Ladd (1990) が示唆したように、社会的スキルと仲間受容との関連に時間的ズレがあるならば、社会的スキル評定は第1回目よりも第2回目のソシオメトリック結果とより関連しやすいであろうと予想される。

方 法

対象児 愛媛大学教育学部附属幼稚園の年中児64名を対象とした。その平均年齢は4歳10か月で、年齢範囲は4歳3か月～5歳3か月であった。なお、対象児の年齢は第1回目の写真ソシオメトリックテスト実施時点で算出した。表1は、第1回目と第2回目の写真ソシオメトリック指名法の結果に基づいて分類した各仲間内地位グループの人数内訳と分類基準を示している。

表1 対象児の内訳と分類基準

グループ	分類基準	第1回目ソシオ			第2回目ソシオ			
		男	女	全体	男	女	全体	
人気児	$SP > 1, L > 0, D < 0$	11	9	20	11	8	19	
拒否児	$SP < -1, L < 0, D > 0$	7	9	16	9	7	16	
平均児	$-1 < SP < 1, -1 < SI < 1$	6	7	13	9	15	24	
無視児	$SI < -1, L < 0, D < 0$	5	5	10	3	1	4	
敵味方児	$SI > 1, L > 0, D > 0$	3	1	4	0	1	1	
		計						
			32	31	63	32	32	64

実施時期 ①子どもの社会的スキルに関する教師評定：1988年6月24日～7月12日。

②写真ソシオメトリックテスト：第1回目のソシオメトリック指名法と評定法は1988年6月20日～7月2日にかけて、第2回目のソシオメトリック指名法と評定法は1988年11月21日～11月22日にかけて実施した。

材料 ①子どもの社会的スキルに関する教師評定項目：Michelson, Sugai, Wood, and Kazdin (1983) の子どもの対人行動評定尺度 (高山・佐藤・佐藤・園田訳, 1987) の中から、子ども用主張行動尺度 (CABS) 27項目を一部修正して使用した。各項目の反応を選定するにあたって、大学生男女各50名を対象にし、27項目の各設問について幼児が示すと思われる攻撃的反応、主張的反応 (適切反応)、消極的反応をそれぞれ自由記述させた。その結果を参考にしながら、各項目について代表的な攻撃的反応、主張的反応 (適切反応)、消極的反応をそれぞれ1つずつ作成した。したがって、原本の子ども用主張行動尺度 (CABS) は5点尺度であるが、本研究ではこれを3点尺度に修正しているし、反応内容もいくつか異なっている。本研究で使用した27項目は付録に示している。これら27項目は、肯定的発言4項目 (項目1, 2, 11, 12)、否定的発言6項目 (項目3, 4, 5, 15, 23, 24)、要求・指示6項目 (項目6, 10, 14, 16, 17, 25)、会話5項目 (項目13, 18, 19, 26, 27)、感情・共感6項目 (項目7, 8, 9, 20, 21, 22) から構成されている。なお、付録では各項目に対する代表的な3つの反応が攻撃的反応、主張的反応、消極的反応のいずれに該当するかを () 内に記入しているが、実際の調査用紙ではこの部分を削除している。また、調査用紙では付録の項目番号順に項目を配列し、各領域名の部分も削除している。

②写真ソシオメトリックテスト：2回の写真ソシオメトリックテストでは、各幼児の個別カラー写真を使用した。写真は、一人で壁を背に立っている姿を正面から撮影し、胸から上の部分を縦5cm×横4cmの大きさにプリントした。さらに、各写真を縦6.5cm×横5cmの白色厚紙に貼り付けて個別写真カードにした。また、写真ソシオメトリック評定法では3つの分類箱を使用した。各箱は底面積が12cm×12cm、3つの側面の高さが5cm、残り1側面の高さが12cmの蓋のない容器形であった。各箱には、高さ12cmの側面の内側面に、それぞれ3色の画用紙に描いたハッピーな顔 (ピンク色)、ニュートラルな顔 (黄色)、悲しそう顔 (青色) の表情略線画が貼り付けてあった。

手続き ①子どもの社会的スキルに関する教師評定：評定項目と回答用紙 (クラスの幼児数) を各クラス担任の教師に渡し、項目ごとに (A), (B), (C) の3つの反応の中から各幼児が示すと思われる反応1つを選択してもらった。

②写真ソシオメトリック指名法：個別面接で行われた。対象児の面前で同一クラスの同性仲間全員の写真カードを取り出し、ほぼランダムな順に縦4枚×横4枚に配列して提示した。この後、各写真カードを順に指さし、対象児に各写真の仲間名を言わせた。仲間の名前を言えない幼児には、その写真の子どもの名前を教えた。しかし、実際に教える必要はほとんどなかった。次に、対象児自身を除く残り全員の写真カードを指さしながら、次のように質問した。「この中で、○○ちゃん (対象児名) が幼稚園で遊ぶとき、1番目に (2番目に、3番目に) 一緒に遊びたい人はだれですか。」遊びたい人3名を指名させた後、「今度はこの中で、○○ちゃんが幼稚園で遊ぶとき、1番目に (2番目に、3番目に) 一緒に遊びたくない人はだれですか。」と質問し、遊びたくない人3名を指名させた。

③写真ソシオメトリック評定法：これも個別面接で写真ソシオメトリック指名法に続いて行

われた。まず机の上に3つの分類箱を横一列に配置した。対象児から見て右側にハッピーな顔の箱、左側に悲しそうな顔の箱、中央にニュートラルな顔の箱を置いた。ニュートラルな顔の箱を中央に置いた方が判断しやすいと考え、対象児ごとに箱の提示位置を変えないことにした。同性仲間全員の写真カードをランダムな順に束ねた後、次の教示を与えて写真カードを1枚ずつ対象児に手渡していった。「今度は、△△組（対象児の組名）のお友達の写真を1枚ずつ○○ちゃん（対象児名）に渡します。○○ちゃんは、写真のお友達をよく見て、○○ちゃんが幼稚園で一緒に遊びたい子だなあと思ったら、この箱（ハッピーな顔の箱）に入れて下さい。遊びたくない子だなあと思ったら、この箱（悲しそうな顔の箱）に入れて下さい。遊びたいか遊びたくないか分からないなあと思ったら、この箱（ニュートラルな顔の箱）に入れて下さい。それでは、この写真の子はどの箱に入れますか？」

ソシオメトリック測度の得点化

①ソシオメトリック指名法：対象児ごとに仲間から受けた肯定的指名数と否定的指名数をそれぞれ集計し、それを2クラスの男児合計または女児合計を単位として標準得点化した。次に、この2つの標準得点（肯定的指名得点=L得点、否定的指名得点=D得点）から、社会的好み得点（ $SP=L-D$ ）と社会的影響力得点（ $SI=L+D$ ）を算出した。

②ソシオメトリック評定法：仲間からハッピーな顔の箱に分類された場合に評定値3を、ニュートラルな顔の箱に分類された場合に評定値2を、悲しそうな顔の箱に分類された場合に評定値1を配点し、対象児ごとにその平均評定値を算出した。

仲間内地位グループの分類方法

Coie, Dodge, and Coppotelli (1982) を一部改良した Coie and Dodge (1988) の方法に従った。ソシオメトリック指名法のL得点、D得点、SP得点、SI得点に基づいて表1の分類基準に従って各地位グループを分類した。

結 果

社会的スキルの平均評定値

表2は、男児、女児および男女全体について、社会的スキル評定の各領域別と全項目に関する平均評定値を示したものである。社会的スキルの評定値は、各項目の消極的反応に-1点を、

表2 社会的スキルの平均評定値

	肯定的 発言	否定的 発言	要 求 指 示	会 話	感 情 共 感	全項目
男児 (N=32)	-0.41 (1.56)	0.34 (4.38)	1.22 (3.91)	-1.34 (2.64)	-2.44 (1.87)	-2.63 (11.94)
女児 (N=31)	-0.61 (1.21)	-1.36 (3.13)	0.87 (2.09)	-1.61 (1.98)	-1.39 (1.96)	-4.10 (7.47)
全体 (N=63)	-0.51 (1.40)	-0.49 (3.91)	1.05 (3.15)	-1.48 (2.34)	-1.92 (1.99)	-3.35 (10.02)

() 内はSD

主張的反応に0点を、攻撃的反応に+1点を配点し、それを各領域別および全項目について合計して算出した。各領域別に、男児平均値と女児平均値間の差を検定した。その結果、否定的発言において $t(61) = 1.74$, $p < .10$ で有意傾向を示し、男児よりも女児が消極的反応の傾向にあった。また、感情・共感では $t(61) = 2.14$, $p < .05$ で有意となり、女児よりも男児が一層消極的反応を示すと評定されていた。その他の領域および全項目では男女間に有意差はなかった。

第1回目ソシオメトリック指名法に基づく地位グループ間の比較

表3は、第1回目ソシオメトリック指名法に基づいて分類した人気児、拒否児、平均児、無視児について、社会的スキル評定の各領域別と全項目に関する平均値を示したものである。各評定値について4(グループ)×2(性別)の分散分析をした。その結果、グループの主効果は要求・指示の領域で $F(3, 51) = 2.53$, $p < .10$ で有意傾向を示した。念のため Duncan の new multiple range test による多重比較をした結果、拒否児 ($M = 1.75$) ≒ 平均児 ($M = 1.62$) ≒ 無視児 ($M = 1.50$) > 人気児 ($M = -0.90$) の傾向にあった。また、性別の主効果は否定的発言の領域で $F(1, 51) = 4.06$, $p < .05$ で有意となり、男児 ($M = -0.04$) > 女児 ($M = -1.47$) であった。その他の領域では、いずれの主効果も交互作用も有意でなかった。

表3 各グループの社会的スキルの平均評定値(第1回目ソシオ)

社会的スキル 評定の領域	人 気 児		拒 否 児		平 均 児		無 視 児	
	男 (N=11)	女 (N=9)	男 (N=7)	女 (N=9)	男 (N=6)	女 (N=7)	男 (N=5)	女 (N=5)
肯定的発言	-0.82 (1.40)	-0.56 (1.07)	0.29 (2.05)	-0.44 (1.64)	-0.50 (0.96)	-0.57 (0.90)	0.40 (1.02)	-0.80 (0.75)
否定的発言	-2.46 (3.37)	-1.56 (2.11)	2.29 (4.03)	-1.22 (3.46)	1.17 (4.98)	-0.14 (3.72)	0.60 (3.67)	-3.60 (1.50)
要求・指示	-1.82 (3.35)	0.22 (2.15)	2.86 (2.47)	0.89 (1.91)	2.00 (4.12)	1.29 (1.83)	2.20 (2.79)	0.80 (2.14)
会 話	-2.09 (2.78)	-0.89 (1.79)	-1.71 (2.60)	-1.89 (2.08)	-0.17 (2.91)	-1.43 (2.20)	-0.80 (1.72)	-2.60 (1.36)
感情・共感	-3.27 (1.60)	-1.44 (1.89)	-2.29 (1.49)	-1.33 (2.06)	-1.67 (2.36)	-1.14 (1.81)	-1.20 (1.47)	-1.20 (1.94)
全 項 目	-10.46 (10.56)	-4.22 (6.71)	1.43 (10.39)	-4.00 (8.98)	0.83 (14.05)	-2.00 (8.07)	1.20 (8.04)	-7.40 (3.20)

() 内はSD

第2回目ソシオメトリック指名法に基づく地位グループ間の比較

表4は、第2回目ソシオメトリック指名法に基づいて分類した人気児、拒否児、平均児について、社会的スキル評定の領域別と全項目に関する平均評定値を示したものである。各評定値について3(グループ)×2(性別)の分散分析をした。その結果、グループの主効果は否定的発言、要求・指示、会話の3領域と全項目でそれぞれ有意であった。つまり、否定的発言では $F(2, 53) = 9.85$, $p < .001$ となり、拒否児 ($M = 2.63$) > 平均児 ($M = -0.67$) ≒ 人気児 ($M = -2.42$) であった(全て $p < .01$)。要求・指示では $F(2, 53) = 7.95$, $p < .001$ となり、

拒否児 ($M=2.88$) \approx 平均児 ($M=1.79$) $>$ 人気児 ($M=-0.90$) であった (全て $p < .01$)。会話では $F(2, 53) = 3.45$, $p < .05$ となり, 拒否児 ($M=-0.06$) $>$ 人気児 ($M=-1.79$) \approx 平均児 ($M=-1.96$) であった (全て $p < .05$)。全項目では $F(2, 53) = 7.27$, $p < .01$ となり, 拒否児 ($M=4.13$) $>$ 平均児 ($M=-3.88$) \approx 人気児 ($M=-8.00$) であった (順に $p < .05$, $p < .01$)。

性別の主効果は否定的発言, 感情・共感の2領域で有意となった。つまり, 否定的発言では $F(1, 53) = 3.92$, $p < .10$ で有意傾向を示し, 男児 ($M=0.59$) $>$ 女児 ($M=-1.23$) の傾向にあった。感情・共感では $F(1, 53) = 5.65$, $p < .05$ となり, 女児 ($M=-1.57$) $>$ 男児 ($M=-2.59$) であった。

グループ×性別の交互作用は要求・指示の領域のみで $F(2, 53) = 2.63$, $p < .10$ で有意傾向を示した。多重比較の結果, 男児では拒否児 ($M=3.78$) \approx 平均児 ($M=2.89$) $>$ 人気児 ($M=-1.64$) の傾向にあるが, 女児では拒否児 ($M=1.71$) \approx 平均児 ($M=1.13$) \approx 人気児 ($M=0.13$) であった。

表4 各グループの社会的スキルの平均評定値 (第2回目ソシオ)

社会的スキル 評定の領域	人 気 児		拒 否 児		平 均 児	
	男	女	男	女	男	女
	(N=11)	(N=8)	(N=9)	(N=7)	(N=9)	(N=15)
肯定的発言	-0.73 (1.42)	-0.50 (0.71)	0.22 (1.87)	-0.43 (1.50)	-0.89 (1.10)	-0.60 (1.14)
否定的発言	-2.27 (3.44)	-2.63 (2.40)	3.67 (2.67)	1.29 (3.69)	1.00 (3.77)	-1.67 (3.11)
要求・指示	-1.64 (3.37)	0.13 (2.26)	3.78 (2.90)	1.71 (2.76)	2.89 (2.89)	1.13 (1.86)
会 話	-2.00 (2.86)	-1.50 (1.80)	-0.33 (2.98)	0.29 (1.75)	-1.33 (1.83)	-2.33 (1.81)
感情・共感	-3.09 (2.07)	-1.13 (1.97)	-1.56 (1.83)	-0.86 (1.55)	-3.00 (1.25)	-1.93 (2.05)
全 項 目	-9.73 (11.58)	-5.63 (7.11)	5.78 (10.00)	2.00 (8.64)	-1.33 (7.99)	-5.40 (7.02)

() 内はSD

社会的スキルのタイプ別反応数における地位グループ間の比較

表5は, 社会的スキルの評定項目27項目中で, 各幼児の攻撃的反応, 主張的反応, 消極的反応がそれぞれ何回あったかを集計し, それに基づいて各地位グループ別に平均値とSDを求めたものである。なお, 表5は各地位グループの男女を一括した全体平均値を示している。各タイプ別反応数について, 第1回目ソシオでは4グループ間で, 第2回目ソシオでは3グループ間でそれぞれ一元配置の分散分析を行った。その結果, 第1回目ソシオでは攻撃的反応数, 主張的反応数, および消極的反応数のいずれにおいても地位グループ間に有意差は認められなかった。第2回目ソシオによる地位グループ間の比較では, 攻撃的反応数において $F(2, 55) = 8.61$, $p < .001$ で有意となり, 拒否児 $>$ 平均児 \approx 人気児 (順に $p < .05$, $p < .01$) であった。しかし, 主張的反応数と消極的反応数においては, 3グループ間に有意差は認められなかった。

表5 各地位グループの攻撃的反応、主張的反応および消極的反応の平均値

	人気児	拒否児	平均児	無視児
第1回目ソシオ	N=20	N=16	N=13	N=10
攻撃的反応数	2.95 (3.73)	7.50 (6.56)	6.85 (7.26)	4.70 (5.27)
主張的反応数	13.45 (7.69)	10.38 (7.61)	12.62 (7.66)	14.50 (5.77)
消極的反応数	10.60 (7.83)	9.13 (5.99)	7.54 (6.38)	7.80 (4.09)
第2回目ソシオ	N=19	N=15	N=24	N=4
攻撃的反応数	2.68 (3.77)	10.40 (6.80)	5.42 (5.20)	4.50 (7.23)
主張的反応数	13.63 (7.73)	9.80 (7.40)	12.29 (7.15)	13.75 (7.98)
消極的反応数	10.68 (8.20)	6.80 (5.31)	9.29 (5.27)	8.75 (5.49)

()内はSD

ソシオメトリック地位諸得点における社会的スキルの3タイプ間の比較

(1)肯定的発言のタイプ間比較 肯定的発言4項目中3項目以上において攻撃的反応、主張的反応、または消極的反応を示すと評定された幼児をそれぞれ攻撃的(A)タイプ、主張的(B)タイプ、消極的(C)タイプとして分類した。その結果、男児ではA=4名、B=15名、C=3名、その他=10名となり、女児ではA=0名、B=22名、C=3名、その他=6名となった。表6は、これらのタイプ別に第1回目および第2回目のソシオメトリック地位諸得点の各平均値とSDを示したものである。まず男児について各地位得点別に3(タイプ)×2(テスト時期)の分散分析を行ったところ、D得点でタイプ×テスト時期の交互作用が $F(2, 19) = 4.05$, $p < .05$ で有意となった。多重比較の結果、Cタイプは1回目(M=1.08)から2回目(M=-0.06)にかけて有意に減少していた($p < .05$)。また1回目においてB(M=-0.39) < C(M=1.08)であった($p < .05$)。SI得点ではタイプの主効果が $F(2, 19) = 2.96$, $p < .10$ で有意傾向を示した。各平均値はA(M=-0.40), B(M=-0.20), C(M=0.61)であり、A < Cの傾向にあった。次に女児について2(タイプ)×2(テスト時期)の分散分析を行ったところ、D得点でタイプの主効果が $F(1, 23) = 4.23$, $p < .05$ で有意となり、B(M=-0.27) < C(M=0.48)であった。その他の得点ではいずれの主効果も交互作用も有意でなかった。

表6 肯定的発言における各タイプの平均ソシオメトリック地位得点

	男児			女児	
	A (N=4)	B (N=15)	C (N=3)	B (N=22)	C (N=3)
第1回目ソシオ					
L得点	-0.45(0.96)	0.10(0.95)	0.24(1.28)	0.08(1.04)	-0.29(0.93)
D得点	0.18(0.45)	-0.39(0.58)	1.08(1.60)	-0.27(0.69)	0.46(0.94)
SP得点	-0.63(1.26)	0.49(1.12)	-0.85(2.76)	0.35(1.61)	-0.75(1.62)
SI得点	-0.27(0.81)	-0.29(1.10)	1.32(0.90)	-0.20(0.74)	0.17(0.93)
平均評定値	2.10(0.29)	2.25(0.29)	1.89(0.55)	2.42(0.26)	2.36(0.21)
第2回目ソシオ					
L得点	-0.71(0.70)	-0.03(0.86)	-0.03(1.59)	0.16(1.01)	-0.23(0.87)
D得点	0.17(0.90)	-0.08(0.81)	-0.06(0.81)	-0.27(0.73)	0.50(0.61)
SP得点	-0.88(1.42)	0.05(1.49)	0.02(2.39)	0.43(1.59)	-0.73(0.77)
SI得点	-0.54(0.76)	-0.12(0.76)	-0.09(0.79)	-0.11(0.75)	0.28(1.29)
平均評定値	2.10(0.34)	2.25(0.27)	2.25(0.56)	2.44(0.29)	2.33(0.14)

()内はSD

(2)否定的発言のタイプ間比較 否定的発言では6項目中4項目以上特定の反応を示すと評定された幼児をそれぞれAタイプ、Bタイプ、Cタイプとした。その結果、男児ではA=13名、B=3名、C=10名、その他=6名となり、女児ではA=4名、B=12名、C=12名、その他=3名となった。表7は、タイプ別にソシオメトリック地位諸得点の各平均値とSDを示したものである。男児について3(タイプ)×2(テスト時期)の分散分析を行ったところ、タイプの主効果がL得点、D得点、SP得点、平均評定値において認められた。つまり、L得点では $F(2,23)=2.78, p<.10$ となり、 $A(M=-0.43), B(M=0.28), C(M=0.65)$ の中で $A<C$ の傾向が認められた。D得点では $F(2,23)=5.40, p<.05$ となり、 $A(M=0.64)>B(M=-0.44)\cong C(M=-0.69)$ であった。SP得点では $F(2,23)=5.13, p<.05$ となり、 $A(M=-1.07)<B(M=0.72)\cong C(M=1.34)$ であった。平均評定値では $F(2,23)=5.96, p<.01$ となり、 $A(M=1.97)<B(M=2.39)\cong C(M=2.49)$ であった(A・B間は $p<.05$ で、A・C間は $p<.01$)。次に女児では、D得点でタイプの主効果が $F(2,25)=2.99, p<.10$ で有意傾向を示した。各平均値は $A(M=0.68), B(M=-0.10), C(M=-0.25)$ であり、 $A>C$ の傾向にあった。また、タイプ×テスト時期の交互作用がL得点で $F(2,25)=3.49, p<.05$ 、SP得点で $F(2,25)=3.47, p<.05$ でそれぞれ有意となった。L得点での交互作用はAタイプが1回目($M=-0.21$)から2回目($M=-0.88$)にかけて有意に減少したことに起因していた。SP得点の交互作用は2回目における $A(M=-1.71)<C(M=0.71)$ に起因していた。

表7 否定的発言における各タイプの平均ソシオメトリック地位得点

	男 児			女 児		
	A (N=13)	B (N=3)	C (N=10)	A (N=4)	B (N=12)	C (N=12)
第1回目ソシオ						
L得点	-0.37(0.92)	0.24(0.87)	0.68(0.85)	-0.21(0.51)	0.20(1.10)	-0.29(0.95)
D得点	0.60(0.91)	-0.57(0.56)	-0.63(0.60)	0.54(0.51)	-0.26(1.04)	0.04(0.98)
SP得点	-0.97(1.37)	0.80(1.43)	1.31(1.15)	-0.75(0.85)	0.47(1.99)	-0.33(1.55)
SI得点	0.23(1.21)	-0.33(0.32)	0.05(0.91)	0.33(0.56)	-0.06(0.78)	-0.25(1.15)
平均評定値	1.96(0.31)	2.49(0.17)	2.41(0.26)	2.23(0.25)	2.40(0.30)	2.41(0.21)
第2回目ソシオ						
L得点	-0.49(0.84)	0.33(0.67)	0.61(0.96)	-0.88(0.38)	-0.07(0.96)	0.16(0.83)
D得点	0.68(1.10)	-0.32(0.32)	-0.75(0.45)	0.83(1.03)	0.07(0.95)	-0.55(0.41)
SP得点	-1.17(1.72)	0.65(0.92)	1.37(1.22)	-1.71(1.41)	-0.14(1.76)	0.71(1.17)
SI得点	0.19(0.93)	0.01(0.52)	-0.14(0.86)	-0.05(0.66)	0.00(0.75)	-0.39(0.59)
平均評定値	1.99(0.35)	2.29(0.28)	2.57(0.26)	2.07(0.33)	2.38(0.35)	2.49(0.22)

()内はSD

(3)要求・指示のタイプ間比較 要求・指示でも6項目中4項目以上特定の反応を示すと評定された幼児をそれぞれAタイプ、Bタイプ、Cタイプとした。その結果、男児ではA=13名、B=5名、C=7名、その他=7名となり、女児ではA=6名、B=18名、C=1名、その他=6名となった。表8は、タイプ別にソシオメトリック地位諸得点の各平均値とSDを示したものである。男児について3(タイプ)×2(テスト時期)の分散分析を行ったところ、タイプの主効果がすべての得点で有意となった。つまり、L得点では $F(2,22)=8.02, p<.01$ となり、 $A(M=-0.35)\cong B(M=-0.24)<C(M=0.99)$ であった($p<.01$)。D得点

では $F(2, 22) = 6.15$, $p < .01$ となり, $A(M = 0.53) > B(M = -0.47) \simeq C(M = -0.80)$ であった(AB 間は $p < .05$ で, AC 間は $p < .01$)。SP得点では $F(2, 22) = 8.13$, $p < .01$ となり, $A(M = -0.88) \simeq B(M = 0.23) < C(M = 1.79)$ であった(AB 間は $p < .05$ で, AC 間は $p < .01$)。SI得点では $F(2, 22) = 3.66$, $p < .05$ となり, $A(M = 0.18) \simeq C(M = 0.19) > B(M = -0.71)$ であった($p < .05$)。平均評定値では $F(2, 22) = 9.57$, $p < .01$ となり, $A(M = 2.00) < B(M = 2.33) \simeq C(M = 2.60)$ であった(AB 間は $p < .05$ で, AC 間は $p < .01$)。女兒についても2(タイプ)×2(テスト時期)の分散分析を行ったが, いずれの得点でも主効果や交互作用は有意でなかった。

表8 要求・指示における各タイプの平均ソシオメトリック地位得点

	男 児			女 児	
	A (N=13)	B (N=5)	C (N=7)	A (N=6)	B (N=18)
第1回目ソシオ					
L得点	-0.33(0.90)	-0.55(0.60)	1.02(0.58)	-0.21(0.68)	0.12(1.05)
D得点	0.56(0.95)	-0.54(0.46)	-0.72(0.48)	0.39(0.97)	-0.20(0.92)
SP得点	-0.90(1.41)	-0.01(0.79)	1.74(0.84)	-0.60(1.28)	0.31(1.79)
SI得点	0.23(1.20)	-1.09(0.72)	0.30(0.66)	0.17(1.07)	-0.08(0.84)
平均評定値	1.95(0.31)	2.37(0.14)	2.48(0.22)	2.31(0.32)	2.42(0.27)
第2回目ソシオ					
L得点	-0.37(0.86)	0.08(0.79)	0.97(0.93)	-0.30(0.74)	0.26(1.09)
D得点	0.50(1.05)	-0.40(0.46)	-0.88(0.19)	0.29(1.17)	-0.22(0.90)
SP得点	-0.86(1.69)	0.47(1.00)	1.85(1.11)	-0.59(1.70)	0.48(1.84)
SI得点	0.13(0.91)	-0.32(0.83)	0.09(0.76)	-0.02(0.97)	0.04(0.78)
平均評定値	2.05(0.34)	2.29(0.29)	2.71(0.17)	2.30(0.43)	2.46(0.32)

() 内はSD

(4)会話のタイプ間比較 会話では5項目中3項目以上特定の反応を示すと評定された幼児をそれぞれAタイプ, Bタイプ, Cタイプとした。その結果, 男児ではA=7名, B=7名, C=15名, その他=3名となり, 女兒ではA=2名, B=13名, C=14名, その他=2名となった。表9は, タイプ別にソシオメトリック地位諸得点の各平均値とSDを示したものである。男児について3(タイプ)×2(テスト時期)の分散分析を行ったところ, SI得点でタイプの主効果が $F(2, 26) = 2.60$, $p < .10$ で有意傾向を示した。各平均値はA($M = -0.09$), B($M = -0.37$), C($M = 0.34$)であり, $B < C$ の傾向にあった。女兒について2(タイプ)×2(テスト時期)の分散分析を行ったところ, タイプの主効果がD得点で $F(1, 25) = 3.93$, $p < .10$, SP得点で $F(1, 25) = 3.59$, $p < .10$ でそれぞれ有意傾向を示した。つまり, D得点ではB($M = -0.43$)がC($M = 0.10$)よりも少なく, SP得点ではB($M = 0.78$)がC($M = -0.24$)よりも多い傾向にあった。また, D得点ではタイプ×テスト時期の交互作用が $F(1, 25) = 3.58$, $p < .10$ で有意傾向を示した。多重比較の結果, 1回目においてB($M = -0.57$) < C($M = 0.31$)の傾向が認められた。

(5)感情・共感のタイプ間比較 感情・共感でも6項目中4項目以上特定の反応を示すと評定された幼児をそれぞれAタイプ, Bタイプ, Cタイプとした。その結果, 男児ではA=0名, B=6名, C=14名, その他=12名となり, 女兒ではA=0名, B=20名, C=8名, その他=3名となった。表10は, タイプ別にソシオメトリック地位諸得点の各平均値とSDを示した

ものである。男児について2（タイプ）×2（テスト時期）の分散分析を行ったところ、S I 得点でタイプの主効果が $F(1, 18) = 8.42$, $p < .01$ で有意となり、 $B(M = -0.59) < C(M = 0.34)$ であった。女児ではいずれの得点でも有意な効果は認められなかった。

表9 会話における各タイプの平均ソシオメトリック地位得点

	男 児			女 児	
	A (N=7)	B (N=7)	C (N=15)	B (N=13)	C (N=14)
第1回目ソシオ					
L得点	-0.30(0.81)	-0.01(1.01)	0.27(1.07)	0.36(1.02)	-0.25(0.90)
D得点	0.18(0.48)	-0.53(0.47)	0.18(1.30)	-0.57(0.58)	0.31(0.95)
SP得点	-0.49(0.94)	0.52(1.21)	0.09(2.18)	0.93(1.46)	-0.55(1.48)
SI得点	-0.12(0.94)	-0.53(1.00)	0.45(0.96)	-0.21(0.79)	0.07(1.11)
平均評定値	2.05(0.24)	2.37(0.22)	2.14(0.44)	2.47(0.26)	2.37(0.23)
第2回目ソシオ					
L得点	-0.42(0.69)	-0.11(0.73)	0.29(1.15)	0.32(1.10)	-0.04(0.86)
D得点	0.36(0.66)	-0.10(0.96)	-0.06(1.16)	-0.30(0.78)	-0.12(0.88)
SP得点	-0.77(1.26)	-0.02(1.51)	0.35(2.15)	0.62(1.72)	0.08(1.54)
SI得点	-0.07(0.46)	-0.21(0.80)	0.23(0.85)	0.02(0.81)	-0.16(0.82)
平均評定値	2.13(0.27)	2.17(0.33)	2.33(0.48)	2.50(0.31)	2.35(0.32)

() 内はSD

表10 感情・共感における各タイプの平均ソシオメトリック地位得点

	男 児		女 児	
	B (N=6)	C (N=14)	B (N=20)	C (N=8)
第1回目ソシオ				
L得点	-0.11 (1.05)	0.17 (1.12)	-0.01 (1.04)	0.02 (1.01)
D得点	-0.64 (0.48)	0.31 (1.24)	-0.17 (0.91)	-0.03 (0.71)
SP得点	0.54 (1.30)	-0.14 (2.13)	0.16 (1.77)	0.05 (1.47)
SI得点	-0.75 (0.99)	0.49 (1.03)	-0.18 (0.82)	-0.02 (0.96)
平均評定値	2.42 (0.17)	2.11 (0.44)	2.39 (0.29)	2.46 (0.21)
第2回目ソシオ				
L得点	0.15 (0.74)	0.12 (1.01)	0.04 (1.14)	-0.13 (0.75)
D得点	-0.58 (0.37)	0.07 (1.17)	-0.13 (0.92)	-0.10 (0.97)
SP得点	0.73 (0.81)	0.05 (2.06)	0.17 (1.89)	-0.04 (1.66)
SI得点	-0.44 (0.84)	0.19 (0.73)	-0.08 (0.85)	-0.23 (0.47)
平均評定値	2.37 (0.25)	2.26 (0.48)	2.43 (0.32)	2.33 (0.38)

() 内はSD

(6)全項目のタイプ間比較 社会的スキル27項目全体に基づいて、幼児をAタイプ、Bタイプ、Cタイプに分類した。分類基準は5領域中3領域以上で特定のタイプに一貫して分類される者であった。その結果、男児ではA=7名、B=6名、C=9名、その他=10名であった。女児ではA=0名、B=16名、C=7名、その他=8名であった。表11は、タイプ別にソシオメトリック地位諸得点の各平均値とSDを示したものである。まず男児について3（タイプ）×2（テスト時期）の分散分析を行ったところ、すべての得点でタイプの主効果が認められた。つ

まり、L得点では $F(2,19) = 4.78, p < .05$ となり、A ($M = -0.59$), B ($M = -0.07$), C ($M = 0.66$) の中でAとC間に有意差 ($p < .05$) が認められた。D得点では $F(2,19) = 4.17, p < .05$ となり、A ($M = 0.33$) > B ($M = -0.55$) \approx C ($M = -0.52$) であった ($p < .05$)。SP得点では $F(2,19) = 4.76, p < .05$ となり、A ($M = -0.92$), B ($M = 0.48$), C ($M = 1.18$) の中でAとC間に有意差 ($p < .05$) が認められた。SI得点では $F(2,19) = 3.22, p < .10$ となり、A ($M = -0.25$), B ($M = -0.61$), C ($M = 0.14$) の中で $B < C$ の傾向が認められた。平均評定値では $F(2,19) = 5.25, p < .05$ となり、A ($M = 2.02$) < B ($M = 2.35$) \approx C ($M = 2.46$) であった ($p < .05$)。女兒についても2 (タイプ) \times 2 (テスト時期) の分散分析を行ったが、いずれの得点でも主効果や交互作用は有意でなかった。

表11 全項目における各タイプの平均ソシオメトリック地位得点

	男 児			女 児	
	A (N=7)	B (N=6)	C (N=9)	B (N=16)	C (N=7)
第1回目ソシオ					
L得点	-0.52(0.58)	-0.28(0.82)	0.75(0.94)	0.18(1.05)	-0.18(1.16)
D得点	0.31(0.46)	-0.64(0.48)	-0.37(1.08)	-0.29(0.94)	-0.15(0.69)
SP得点	-0.83(0.58)	0.37(1.11)	1.12(1.92)	0.48(1.80)	-0.03(1.66)
SI得点	-0.21(0.87)	-0.92(0.76)	0.38(0.62)	-0.11(0.86)	-0.33(0.93)
平均評定値	1.99(0.19)	2.42(0.17)	2.38(0.38)	2.43(0.28)	2.51(0.19)
第2回目ソシオ					
L得点	-0.65(0.61)	0.15(0.74)	0.57(1.18)	0.27(1.15)	-0.07(0.78)
D得点	0.36(0.66)	-0.45(0.43)	-0.67(0.57)	-0.20(0.96)	-0.43(0.43)
SP得点	-1.01(1.00)	0.60(0.95)	1.24(1.69)	0.48(1.95)	0.36(1.17)
SI得点	-0.30(0.77)	-0.31(0.76)	-0.10(0.76)	0.07(0.82)	-0.50(0.47)
平均評定値	2.05(0.16)	2.28(0.27)	2.55(0.37)	2.46(0.34)	2.48(0.23)

() 内はSD

社会的スキル評定値とソシオメトリック地位得点との相関係数

表12は、全員のデータに基づいて社会的スキルの各領域別と全項目に関する評定値(それぞれ合計得点)と第1回および第2回目のソシオメトリック地位諸得点との相関係数をまとめたものである。表12から、男児と女児の相関パターンが異なることが分かる。女児で有意な相関値を示したのは、否定的発言とD得点間の正の相関、全項目とD得点間の正の相関、否定的発言とSP得点間の負の相関の3箇所だけであった。いずれも第2回目ソシオメトリック地位得点との相関関係であった。第1回目ソシオメトリック地位得点はすべての社会的スキル評定値と相関していなかった。それに対して、男児では第1回目と第2回目のソシオメトリック地位得点の結果が類似しており、否定的発言や要求・指示の領域で攻撃的応答を示す者ほどL得点、SP得点、平均評定値は低く、逆にD得点は高くなる関係にあった。

第1回目ソシオから第2回目ソシオにかけての仲間内地位の変動人数

表13は、第1回目ソシオメトリック指名法に基づいて分類された各地位グループの幼児が第2回目ソシオメトリック指名法に基づく分類ではどの地位グループに分類されたかの人数内訳を示したものである。表13から、第1回目ソシオと第2回目ソシオで同一の地位グループに分

表12 社会的スキル評定値とソシオメトリック地位得点との相関係数

		肯定的 発言	否定的 発言	要 求 指 示	会 話	感 情 共 感	全項目
第1回目ソシオ							
L得点	男児	-.39*	-.39*	-.43*	-.18	-.39*	-.44*
	女児	.02	.05	-.16	.15	-.04	.01
D得点	男児	-.07	.48**	.52**	.02	-.08	.33
	女児	.14	.20	.23	-.10	-.01	.14
SP得点	男児	-.19	-.51**	-.56**	-.12	-.18	-.45**
	女児	-.07	-.09	-.22	.14	-.02	-.08
SI得点	男児	-.43*	.08	.09	-.15	-.45**	-.10
	女児	-.16	.26	.08	.06	-.05	.16
平均評定値	男児	-.04	-.45**	-.55**	-.08	-.04	-.38
	女児	-.24	-.23	-.22	.00	-.18	-.25
第2回目ソシオ							
L得点	男児	-.29	-.42*	-.46**	-.27	-.36*	-.46**
	女児	.00	-.30	-.17	-.07	.06	-.18
D得点	男児	.21	.54**	.56**	.15	.15	.47**
	女児	-.01	.50**	.32	.30	.06	.39*
SP得点	男児	-.28	-.52**	-.56**	-.23	-.28	-.51**
	女児	.01	-.44*	-.26	-.20	.00	-.31
SI得点	男児	-.10	.16	.13	-.15	-.26	.01
	女児	-.01	.20	.17	.25	.14	.23
平均評定値	男児	-.30	-.56**	-.61**	-.19	-.27	-.53**
	女児	-.06	-.31	-.17	-.05	-.06	-.19

*: p < .05 **: p < .01

表13 第1回目ソシオから第2回目ソシオにかけての地位グループの変動人数

		第2回目ソシオによる地位グループの分類						
			人気児	拒否児	平均児	無視児	敵味方児	計
第 1 回 目 ソ シ オ に よ る 地 位 グ ル ー プ の 分 類	人気児	全体	14	1	4	1	0	20
		男児	8	0	2	1	0	11
		女児	6	1	2	0	0	9
	拒否児	全体	1	6	6	2	1	16
		男児	1	4	1	1	0	7
		女児	0	2	5	1	1	9
	平均児	全体	2	4	7	0	0	13
		男児	1	3	2	0	0	6
		女児	1	1	5	0	0	7
	無視児	全体	2	3	4	1	0	10
		男児	1	2	1	1	0	5
		女児	1	1	3	0	0	5
	敵味方児	全体	0	1	3	0	0	4
		男児	0	0	3	0	0	3
		女児	0	1	0	0	0	1
	計	全体	19	15	24	4	1	63
		男児	11	9	9	3	0	32
		女児	8	6	15	1	1	31

類された幼児は、人気児20名中14名(70%)、拒否児16名中6名(38%)、平均児13名中7名(54%)、無視児10名中1名(10%)、敵味方児4名中0名(0%)であった。人気児の地位は最も安定し、約4か月半の期間においても同一地位を維持する者が多いといえる。拒否児と無視児は、いずれも地位の変動が激しいが、両者を比べると拒否児の方に地位の維持者が多い。

各地位グループにおける社会的スキルのタイプ別人数内訳

表14は、第1回目ソシオと第2回目ソシオのそれぞれに基づいて分類された各地位グループにおいて、教師による社会的スキル評定の領域別に、攻撃的(A)タイプ、主張的(B)タイプ

表14 各地位グループにおける社会的スキルのタイプ別人数内訳

グループ	人気児		拒否児		平均児		無視児		敵味方児	
	1回	2回	1回	2回	1回	2回	1回	2回	1回	2回
ソシオ	1回	2回	1回	2回	1回	2回	1回	2回	1回	2回
分類人数	20	19	16	15	13	24	10	4	4	1
(1)肯定的発言										
Aタイプ	1	1	2	2	0	0	1	1	0	0
Bタイプ	12	11	6	7	10	16	8	3	1	0
Cタイプ	2	1	3	2	0	2	0	0	1	1
その他	5	6	5	4	3	6	1	0	2	0
(2)否定的発言										
Aタイプ	1	1	5	9	5	6	2	1	4	0
Bタイプ	7	5	4	3	3	6	1	1	0	0
Cタイプ	9	10	5	1	3	9	5	2	0	0
その他	3	3	2	2	2	3	2	0	0	1
(3)要求・指示										
Aタイプ	2	2	6	7	4	8	3	1	4	1
Bタイプ	7	8	5	3	6	10	5	2	0	0
Cタイプ	7	7	0	0	1	0	0	1	0	0
その他	4	2	5	5	2	6	2	0	0	0
(4)会 話										
Aタイプ	1	1	2	6	4	2	1	0	1	0
Bタイプ	9	8	3	3	4	7	4	2	0	0
Cタイプ	9	9	9	5	4	13	4	1	3	1
その他	1	1	2	1	1	2	1	1	0	0
(5)感情・共感										
Aタイプ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Bタイプ	8	9	6	5	6	9	6	3	0	0
Cタイプ	7	7	5	5	5	10	2	0	3	0
その他	5	3	5	5	2	5	2	1	1	1
(6)全 項 目										
Aタイプ	0	0	2	4	3	2	1	1	1	0
Bタイプ	8	9	4	3	5	8	5	2	0	0
Cタイプ	9	8	4	2	2	5	1	1	0	0
その他	3	2	6	6	3	9	3	0	3	1

プ、消極的（C）タイプおよびこれら3タイプのいずれにも該当しないその他のタイプの各人数内訳を示したものである。表14から、第1回目ソシオから第2回目ソシオにかけて人気児ではほとんど人数の増減は見られないし、各タイプの人数増減も見られない。同様に拒否児の全体人数は第1回目（16名）と第2回目（15名）間に増減が見られない。しかし、各タイプ別に見ると、人気児の場合よりも大幅な変動が見られる。特に否定的発言ではAタイプが第1回目（5名）から第2回目（9名）と増加し、逆にCタイプが第1回目（5名）から第2回目（1名）へと減少している。同様に会話でも、Aタイプが第1回目（2名）から第2回目（6名）へと増加し、逆にCタイプが第1回目（9名）から第2回目（5名）へと減少している。これほど明確ではないが、全項目でも同様の傾向が認められる。なお、平均児ではほとんどの領域で各タイプの人数が第1回目から第2回目にかけて増加しているが、これは全体人数の大幅な増加を反映したものであろう。また、無視児の人数は第1回目（10名）から第2回目（4名）にかけて減少したが、その多くはBタイプの幼児であったことが分かる。

考 察

まず社会的スキル評定値に関する仲間内地位グループ間の比較結果について考察する。第1回目ソシオメトリック得点に基づく地位グループ間比較では、要求・指示の領域にのみグループ間差が認められ、人気児の仲間に対する要求・指示が他のグループよりも消極的である傾向を示した（表3参照）。それに対して、第2回目のソシオメトリック得点に基づく地位グループ間比較では、要求・指示の領域で一層明確なグループ間差が見られたのに加えて、否定的発言と会話の2領域および全項目においても有意なグループ間差が認められた（表4参照）。これらの結果は、教師による社会的スキル評定値が第1回目よりも第2回目のソシオメトリック地位得点と密接に関連することを示している。これは、社会的スキル改善と仲間受容との関連に時間的ズレがあるとした Mize and Ladd (1990) の見解と一致する。すなわち、クラス編成3か月後時点では、仲間情報はまだ仲間の社会的スキルを正確に反映しにくく、そのため教師情報と十分に一致しない。しかし、クラス成員が仲間との相互作用体験を蓄積するにつれて、仲間情報は仲間の社会的スキルを正確に反映するようになり、その結果教師情報と一致できると説明できる。ところが、表12の相関係数を見ると、社会的スキル評定値は第1回目のソシオメトリック地位得点と有意な相関を示しており、しかも相関パターンは第1回目と第2回目でかなり類似している。特に、否定的発言や要求・指示の領域では両者の相関パターンは極めて類似していた。これらのスキル領域では、仲間も教師と同様の評価をしている可能性を示唆する。その意味で、クラス編成3か月後の仲間情報も十分に信頼できるといえる。

2つの時期の仲間情報が教師情報と類似した相関関係を示しながら、なぜ第1回目よりも第2回目の地位グループ間に有意差が多く認められたのであろうか。その理由の1つは、表12の相関係数から分かるように、第1回目よりも第2回目の相関値がやや大きく、社会的スキル評定値と仲間情報との関係がより明確になったことである。表6から表11の結果も、これと同様の事情を反映している。すなわち、攻撃的タイプ、主張的タイプ、消極的タイプの地位諸得点を見比べると、第1回目から第2回目にかけて大幅な変化は見られないものの、第2回目にかけて攻撃的タイプのL得点は減少しD得点は増加する傾向にあり、逆に主張的タイプのL得点は増加しD得点は減少する傾向にある。これによって、有意に達しなかった第1回目の地位グ

ループ間差が第2回目では有意になったと考えられる。もう1つの理由は、表13から分かるように、第1回目から第2回目にかけて地位の変動者が多く見られたことである。無視児は10名から4名に減少し、逆に平均児は13名から24名に増加した。中間的地位の平均児が増加したことに伴って、拒否児グループの特徴がより顕著になり、比較的変動の少ない人気児とのグループ間差が明確になったものと考えられる。拒否児グループの特徴が顕著になったことは、次の2点から明らかである。まず表5を見ると、拒否児の攻撃的反応数では第1回目 ($M=7.50$) から第2回目 ($M=10.40$) へと増加し、人気児や平均児グループよりも有意に多くなった。それに対して、他のグループの攻撃的反応数、主張的反応数および消極的反応数は第1回目から第2回目にかけて大きく変化していない。次に表14から、拒否児グループの攻撃的タイプ者数は、否定的発言の第1回目(5名)から第2回目(9名)へ、会話の第1回目(2名)から第2回目(6名)へと増加している。それに対応して、拒否児グループの消極的タイプ者数は、否定的発言の第1回目(5名)から第2回目(1名)へ、会話の第1回目(9名)から第2回目(5名)へと減少している。これほど明確ではないが、全項目でも同様に攻撃的タイプ者数の増加と消極的タイプ者数の減少傾向が認められる。攻撃的反応を示す幼児が拒否児グループに集中して第2回目の拒否児グループの平均スキル得点を攻撃的方向に一段と高め、その結果として第2回目では人気児グループとの差が有意に達したものと考えられる。

このように考えると、本研究の結果は人気児や平均児の肯定的な対仲間行動と仲間受容との関連よりも、拒否児の攻撃的な対仲間行動と仲間拒否との関連の方に時間的ズレが大きい可能性を示唆する。Mize and Ladd (1990)の社会的スキル訓練研究は、拒否児の肯定的な対仲間行動が増加しても、すぐには仲間から受容されるようにはならないことを示した。これとは逆に、本研究の結果は、拒否児が攻撃的反応を示しても、すぐには仲間から拒否されるようにはならないことを示している。いずれも、行動的変容と地位変容との時間的ズレが拒否児に特有のものである可能性を示唆する。おそらく、一時的な行動で仲間の信頼を得たり失うことは少ないが、継続的に実行され一定の限度に達すると、仲間受容や仲間拒否の変化をもたらすのであろう。もしそうであるならば、拒否児の社会的スキル訓練研究では、スキルの訓練や改善だけでなく長期的な定着や維持を促進するための対策を講じなければならない。

第2回目の地位グループ間比較から、拒否児は全領域で最も高い得点を示し、攻撃的反応の傾向が強かった(表4参照)。特に、否定的発言や要求・指示で攻撃的反応が多いこと、仲間との会話で消極的反応が少ないことが仲間から拒否されやすい原因ではないかと考えられる。会話については、表4から拒否児の会話は決して攻撃的ではなく、むしろ主張的反応レベルであると言えるかもしれない。表12の相関係数を見ても、会話はすべてのソシオメトリック地位得点と有意な相関を示していない。他の地位グループとの間に有意差が見られたのは、おそらく本研究の幼児が全般に会話では消極的方向に集中していると評定されたからであろう。表2の会話スキルの平均評定値は、男児 ($M=-1.34$) も女児 ($M=-1.61$) も消極的方向に偏っていた。このために、比較的消極的でない拒否児と他の地位グループ間に有意差が生じたものと考えられる。付録の会話領域を見ると、消極的反応はほとんど会話の開始や応答をしないで黙っていることを意味する。したがって、黙っている方が少なくとも拒否されないことになる。多分に状況や相手に依存すると考えられるけれども、これは幼児集団特有の現象なのか、日本人全般の傾向なのか、種々の年齢段階で再検討すべき興味深い問題である。なお、第2回目の結果においても、肯定的発言や感情・共感の示し方は幼児の仲間内地位を決定しなかった。表

2から分かるように、この2領域では他の領域に比べて分散が小さく、各幼児の評定値に大幅な変動が見られなかった。つまり、肯定的発言ではどの幼児も適応的レベルの範囲にあると評定されており、感情・共感では全般に消極的レベルの範囲に集中していると評定されていた。この結果は、拒否児や無視児がすべての社会的スキルに欠けているのではなく、特定の社会的スキルに問題があることを裏付けている。

拒否児や平均児と異なる人気児の特徴は、全領域にわたって消極的反応の傾向にあり、特に否定的発言や要求・指示が少ないことであった。人気児は否定的発言や強引な要求・指示を控えて、相手の感情を害さないように留意していると解釈できる。この解釈は、人気児が他の地位グループよりも他者の欲求や意図を理解する能力において優れているという研究結果(Dodge, Murphy, & Buchsbaum, 1984)と符合するものである。しかし、別の解釈も可能である。付録のスキル項目を検討すると、否定的発言と要求・指示の項目は他者からの働きかけに対する応答場面が多い。これらの項目で消極的反応を示すことは、他者からの不平・苦情や要求・指示を寛容に受け入れることを意味している。これは、人気児ほど会話で消極的反応を示すという上述の結果とも一致する。また、全項目における攻撃的タイプは7名(すべて男児)であったが(表11参照)、その中の4名は拒否児であり、人気児は0名であった。一方、人気児は主張的タイプ6名中3名から、消極的タイプの9名中6名へと増加していた。この結果は、男児でも人気児では主張的タイプよりも消極的タイプの方が多いうことを示している。これらの結果を総合すると、本研究の人気児は仲間に対する積極的な自発的働きかけによって人気を得ているというよりも、むしろ仲間の反応に対する寛容な応答によって人気を得ているのではないかと考えられる。仲間加入方略の研究では、人気児は他者指向的あるいは集団指向的反応を示し、拒否児は自己指向的反応を示しやすいと報告されている(Putallaz, 1983; Putallaz & Gottman, 1981; Putallaz & Wasserman, 1989)。仲間加入は自発的働きかけ場面である。他者からの働きかけに応答する場面で他者指向的反応を示すことは、相手の言動に対して抗議や反論をしないで相手を受け入れることを意味するのかもしれない。本研究では、教師による社会的スキル評価基準それ自体がやや消極的な方向にあった(表2の全項目参照)が、仲間の評価基準もこれと同傾向にあるのではなかろうか。

次に、社会的スキルの性差について考察する。女兒は男児に比べて攻撃的反応を示さないと評定されていた。表11の社会的スキル全項目に基づく攻撃的タイプは男児7名であったが、女兒は0名であった。女兒では主張的タイプが16名もおり、全般に適応的スキルを示すと捉えられている。このためか、表12の相関係数でも女兒の社会的スキル評定は仲間情報による地位得点とほとんど有意な相関関係を示さなかった。女兒が実際にそうなのか、それとも女兒の攻撃的反応が男児と異なる形態をとるのか、あるいは女兒の攻撃的行動が極端でなく教師から注目されにくいためなのか今後解明すべき問題である。領域別に性差を見ると、女兒は男児に比べて、否定的発言を抑制し、感情・共感を適切に表現していると評定されていた。これは、本研究の社会的スキル項目が身体行動的表現よりも言語的表現領域を扱った項目が多かったからかもしれない。いずれにしても、幼児期でもすでに社会的スキル領域に性差が見られることは確かである。適応的スキルを示すと評定された女兒集団でも仲間内地位に相違があることから、女兒の仲間内地位を決定する社会的スキルは何かをさらに検討する必要がある。社会的スキルは集団の規範や価値観を色濃く反映するので、今後の研究では性役割観や性役割期待などの性質やその発達との関連も探究する必要がある。

最後に、仲間内地位の変動結果について述べる。表13の地位変動に関する人数分析から、幼児期でも人気児の地位は最も安定しており、無視児が最も変動しやすいことが分かった。従来の研究では、仲間関係に問題を抱えやすい拒否児と無視児を比べると、拒否児ほど地位が持続しやすく、将来にわたって仲間関係に問題をもつ可能性が高いと指摘されている (Parker & Asher, 1987)。本研究は同一クラス内での短期間にわたる地位変容を検討しただけであるが、やはり拒否児の地位は維持されやすく、無視児の地位変動は激しいことを示した。興味深いことは、これら2グループと対比して、人気児の地位はクラス編成3か月時点ですでに確立しており、しかもその地位が持続しやすいことである。拒否児の地位変容が期間を要することを考慮すると、なぜ人気児の地位は早い段階で決定するのかを含めて人気児の特徴をさらに分析する必要がある。それを通して、拒否児の社会的スキル訓練や指導に有益な知見が得られるであろう。

要 約

本研究では、幼稚園年中児を対象にして、仲間内地位（仲間情報）と担任教師による幼児の社会的スキル評定（教師情報）との関連を検討した。幼児に対しては、クラス編成から約3か月後に第1回目の写真ソシオメトリックテストを、それから4か月半後に第2回目の写真ソシオメトリックテストを実施した。幼児の社会的スキルは肯定的発言、否定的発言、要求・指示、会話、感情・共感の5領域について担任教師から評定してもらった。

主な結果は、以下のとおりであった。(1)第1回目ソシオメトリック得点に基づく地位グループ間比較では、要求・指示の領域にのみグループ間差が認められ、人気児の仲間に対する要求・指示が他のグループよりも消極的である傾向を示した。(2)第2回目のソシオメトリック得点に基づく地位グループ間比較では、要求・指示、否定的発言、会話の3領域および全項目においてグループ間差が認められた。拒否児は人気児よりも否定的発言、要求・指示、全項目で攻撃的反応が多く、会話では消極的反応が少なかった。

これらの結果から、拒否児は攻撃的反応によって仲間から敬遠され、人気児は仲間への積極的働きかけよりも仲間からの働きかけに対して寛容に応答することによって仲間受容が高いことが示唆された。また、社会的スキル評定は第1回目よりも第2回目のソシオメトリック地位得点と密接に関連したことから、拒否児の攻撃的反応に対する仲間評価と教師評価に時間的ズレがあることが分かった。最後に仲間内地位の安定性は人気児が高いこと、社会的スキル領域に性差が見られたことについて、今後の社会的スキル研究との関連で考察した。

付記 本研究の資料収集にあたり快くご協力下さいました愛媛大学教育学部附属幼稚園の先生方と園児の皆さんに心からお礼申し上げます。また、資料収集にあたっては、風早典子さん、河崎洋子さん、立川ゆりかさん、西岡真理さん、八木恭子さん、山下三枝さんから多大な援助を受けました。ここに記して感謝の意を表します。

引用文献

Bierman, K. L., & Furman, W. 1984 The effect of social skills training and peer involvement on the social ad-

- justment of preadolescents. *Child Development*, 55, 151–162.
- Coie, J. D., & Dodge, K. A. 1988 Multiple sources of data on social behavior and social status in the school: A cross-age comparison. *Child Development*, 59, 815–829.
- Coie, J. D., Dodge, K. A., & Coppotelli, H. 1982 Dimensions and types of social status: A cross-age perspective. *Developmental Psychology*, 18, 557–570.
- Dodge, K. A., Murphy, R. R., & Buchsbaum, K. 1984 The assessment of intention-cue detection skills in children: Implications for developmental psychopathology. *Child Development*, 55, 163–173.
- Dodge, K. A., Pettit, G. S., McClaskey, C. L., & Brown, M. M. 1987 Social competence in children. *Monographs of the Society for Research in Child Development*, 51(2, Serial No. 213)
- Gottman, J. M., Gonso, J., & Rasmussen, B. 1975 Social interaction, social competence, and friendship in children. *Child Development*, 46, 709–718.
- Hartup, W. W. 1983 Peer relations. In E. M. Hetherington (Ed.), *Handbook of child psychology: Socialization, personality, and social development*. Vol. 4, pp.103–196. New York: Wiley.
- Hartup, W. W., Glazer, J. A., & Charlesworth, R. 1967 Peer reinforcement and sociometric status. *Child Development*, 38, 1017–1024.
- Herbert, M. 1986 Social skills training with children. In C. R. Hollin & P. Trower (Eds.), *Handbook of social skills training: Applications across the life span*. Vol. 1, pp.11–32. Oxford: Pergamon Press.
- Kurdek, L. A., & Krile, D. 1982 A developmental analysis of the relation between peer acceptance and both interpersonal understanding and perceived social self-competence. *Child Development*, 53, 1485–1491.
- Ladd, G. W. 1981 Effectiveness of a social learning method for enhancing children's social interaction and peer acceptance. *Child Development*, 52, 171–178.
- 前田健一 1989 幼児の仲間関係に関する研究—ソシオメトリック選択の性別偏好と安定性の検討—愛媛大学教育実践研究指導センター紀要, 第7号, 63–78.
- McConnell, S. R., & Odom, S. L. 1986 Sociometrics: Peer-referenced measures and the assessment of social competence. In P. S. Strain, M. J. Guralnick, & H. M. Walker (Eds.), *Children's social behavior: Development, assessment, and modification*. New York: Academic Press, pp.215–284.
- Michelson, L., Sugai, D. P., Wood, R. P., & Kazdin, A. E. 1983 *Social skills assessment and training with children*. Plenum. (高山巖・佐藤正二・佐藤容子・園田順一訳, 1987 Hand Book 子どもの対人行動—社会的スキル訓練の実際—岩崎学術出版社)
- Mize, J., & Ladd, G. W. 1990 A cognitive-social learning approach to social skills training with low-status preschool children. *Developmental Psychology*, 26, 388–397.
- Oden, S., & Asher, S. R. 1977 Coaching children in skills for friendship making. *Child Development*, 48, 495–506.
- Parker, J. D., & Asher, S. R. 1987 Peer relations and later personal adjustment: Are low-accepted children at risk? *Psychological Bulletin*, 102, 357–389.
- Putallaz, M. 1983 Predicting children's sociometric status from their behavior. *Child Development*, 54, 1417–1426.
- Putallaz, M., & Gottman, J. M. 1981 An interactional model of children's entry into peer groups. *Child Development*, 52, 986–994.
- Putallaz, M., & Wasserman, A. 1989 Children's natural entry behavior and sociometric status: A developmental perspective. *Developmental Psychology*, 25, 297–305.

付録 子どもの対人行動に関する教師評定項目

この評定項目は、全部で27項目あります。幼児が経験するであろうと思われる様々な場面での対人関係や対人的行動について記述してあります。項目ごとに、幼児が示すであろうと思われる代表的な反応を3種類記述してあります。最近の2か月間に先生が行ってこられた観察に基づいて、ご判断下さい。種々の対人場面で、各幼児が通常最もしやすい反応はどれでしょうか？各項目ごとに用意されている(A), (B), (C)の反応の中で、各幼児の特徴に最も当てはまる反応を選んで、その記号に○印を付けて下さい。各項目には、代表的な3種類の反応しか用意していません。3つの反応のどれにも当てはまらないという場合があるかもしれませんが、その場合は3つの中で最も近似している反応を選んで下さい。各項目について、できるだけ客観的かつ正確に判断して、答えの反応を選択して下さい。なお、回答は別紙の回答用紙に記入して下さい。

【肯定的発言4項目】

- (1) 誰かが○○ちゃん(君)に「あなたは大変よい子だね。」と言ったとします。こういう場合、普通○○ちゃん(君)は次の3つの反応のどれを示すでしょうか？
- (A) 「はい、私が一番よい子よ。」と当り前のように言う。(攻撃的反応)
 (B) 「ありがとう。」と言う。(主張的反応)
 (C) 何も言わず、顔を赤らめる。(消極的反応)
- (2) ○○ちゃん(君)が本当にすごいと思っていることを他の誰かがやったとします。こういう場合、普通○○ちゃん(君)は、
- (A) 何も言わない。(消極的反応)
 (B) 「そんなこと大したことない。私ならあれよりもっとうまくできる。」と言う。(攻撃的反応)
 (C) 「ほんとうにすごいねえ。」と言う。(主張的反応)
- (11) 誰かが○○ちゃん(君)のした事について、「とても立派だね。」とほめてくれたとします。こういう場合、普通、○○ちゃん(君)は、
- (A) 「当り前よ。」と自慢げに言う。(攻撃的反応)
 (B) 「ありがとう。」と言う。(主張的反応)
 (C) 無視し、何も言わない。(消極的反応)
- (12) ある子が○○ちゃん(君)に大変親切にしてくれたとします。こういう場合、普通、○○ちゃん(君)は、
- (A) 「大変親切にしてくれて、ありがとう。」と言う。(主張的反応)
 (B) 無視し、何も言わない。(消極的反応)
 (C) 自分は親切にされても当然のようにふるまう。(攻撃的反応)

【否定的発言6項目】

- (3) ○○ちゃん(君)が大好きな事に取り組んでいます。すると、他の誰かが「ぼくは、そんなの嫌いだなあ。」と言ったとします。こういう場合、普通、○○ちゃん(君)は、
- (A) 「私が好きなんだから、放っといてよ。」と言う。(攻撃的反応)
 (B) 「これは、とてもおもしろいよ。」と言う。(主張的反応)
 (C) 心が傷つき、何も言わない。(消極的反応)
- (4) ○○ちゃん(君)が忘れ物をしました。すると、誰かが「馬鹿だな、いつも忘れて。本当にもうダメな子だな。」と言ったとします。こういう場合、普通、○○ちゃん(君)は、
- (A) 「おまえの方がバカだよ。」と言い返す。(攻撃的反応)
 (B) 「そんなことはないよ。忘れ物をしたけど、バカじゃないよ。」と言う。(主張的反応)
 (C) 何も言わないか、無視する。(消極的反応)

- (5) 友達が待ち合わせに遅れてきました。○○ちゃん(君)は腹を立てています。友達は遅れてきたことについて、何も言いません。こういう場合、普通、○○ちゃん(君)は、
- (A) 「ずっと待っていたのよ。今度から遅れないでね。」と優しく言う。(主張的反応)
 (B) 友達に対して、何も言わない。(消極的反応)
 (C) 「マヌケ、遅れやがって!」と怒って言う。(攻撃的反応)
- (15) ○○ちゃん(君)は、誰かにいやなことをされました。○○ちゃん(君)は腹が立っているとします。こういう場合、普通、○○ちゃん(君)は、
- (A) 「パーカ、あんたなんか嫌いだ!」と言う。(攻撃的反応)
 (B) 「どうして、そんなことするの。やめてよ。」と言う。(主張的反応)
 (C) 傷つけられた様子をするが、その子に対しては何も言わない。(消極的反応)
- (23) ○○ちゃん(君)は、ある子に何か言われて、侮辱された気分になったとします。こういう場合、普通、○○ちゃん(君)は、
- (A) その子に、もう二度とそんなこと言わないようにと言う。(主張的反応)
 (B) 侮辱された気分にはなっているが、何も言わない。(消極的反応)
 (C) その子に対して、侮辱し返し、悪口、悪態をつく。(攻撃的反応)
- (24) ○○ちゃん(君)が話していると、ある子が途中で話の邪魔をしたとします。こういう場合、普通、○○ちゃん(君)は、
- (A) 「今、話をしているから、あとで!」と言う。(主張的反応)
 (B) 何も言わず、そのまま邪魔した子に話し続けさせる。(消極的反応)
 (C) 「邪魔するなよ。」と怒る。(攻撃的反応)

【要求・指示6項目】

- (6) ○○ちゃん(君)が誰か他の子にやってもらいたいことがあります。こういう場合、普通、○○ちゃん(君)は、
- (A) 何もしてほしいとは頼まない。(消極的反応)
 (B) 「これをやってよ!」と命令口調で言う。(攻撃的反応)
 (C) 「すみませんが、私のためにやってくれませんか。」と丁寧に頼み、してほしいことを説明する。(主張的反応)
- (10) 誰かが○○ちゃん(君)にある事をしてくれるように頼みました。けれども、何のために、なぜそうしなければならないのか○○ちゃん(君)には分からないとします。こういう場合、普通○○ちゃん(君)は、
- (A) 言われるままにやり、何も言わない。(消極的反応)
 (B) 「バカらしい。するもんか!」と言う。(攻撃的反応)
 (C) する前に、「なぜ、これをしてほしいのか分からないのですが。」と言う。(主張的反応)
- (14) ○○ちゃん(君)は列に並んで順番を待っています。その前に誰かが割って入ってきたとします。こういう場合、普通、○○ちゃん(君)は、
- (A) 「この列から出る、バカ!」と大声で言う。(攻撃的反応)
 (B) その子に対して、何も言わない。(消極的反応)
 (C) 「ここは私が先です。順番を守って下さい。」と言う。(主張的反応)
- (16) ○○ちゃん(君)が使いたいと思っている物を誰か他の子もっているとします。こういう場合、普通、○○ちゃん(君)は、
- (A) 使わせてくれるよう頼んだりしない。(消極的反応)

- (B) その子から強引に取り上げる。 (攻撃的反応)
 (C) 「すみませんが、それを使いたいのので貸してできませんか。」と言って丁寧に頼む。 (主張的反応)
- 17) ○○ちゃん(君)が持っている物を誰かが貸してくれるようにと頼みました。しかし、それは新品なので貸したくないとします。こういう場合、普通、○○ちゃん(君)は、
 (A) 「ちょうど手に入れたばかりなので、貸したくないのです。またの時にね。」と言う。(主張的反応)
 (B) 「いやだ。自分のを買ったらいいだろう！」と言う。 (攻撃的反応)
 (C) たとえ貸したくなくても、あきらめて貸す。 (消極的反応)
- 25) ある子が○○ちゃん(君)に何かを頼みました。しかし、それをすると自分が本当にしたいと思っていることができなくなりそうです。こういう場合、普通、○○ちゃん(君)は、
 (A) 「いやよ！誰か他の子に言ってよ。」と言う。 (攻撃的反応)
 (B) だまって相手の言うとおりにする。 (消極的反応)
 (C) 「私は今他にしたい事があるので、また別の時にね。」と丁寧に断わる。 (主張的反応)

【会話5項目】

- 13) ○○ちゃん(君)が、友達と大きな声で話していると、誰かが「もう少し静かにしてくれませんか！」と言ったとします。こういう場合、普通、○○ちゃん(君)は、
 (A) すぐに話すのをやめる。 (消極的反応)
 (B) 「気に入らないなら、自分が出ていけ！」と言い、大声で話し続ける。 (攻撃的反応)
 (C) 「ごめんなさい。静かにします。」と言い、静かな声で話す。 (主張的反応)
- 18) 誰かが大好きなテレビ番組について話し合っています。○○ちゃん(君)もそこに加わって話したいと思っています。こういう場合、普通、○○ちゃん(君)は、
 (A) 話に割り込み、すぐに自分中心に話し出す。 (攻撃的反応)
 (B) 話している子たちの所に徐々に近づいて行き、好機をとらえて自然に会話に入っていく。 (主張的反応)
 (C) 近づいて行くが、何も言わない。 (消極的反応)
- 19) ○○ちゃん(君)が大好きな事に取り組んでいます。誰かが「何してるの？」と尋ねたします。こういう場合、普通、○○ちゃん(君)は、
 (A) 自分の作業をし続け、何も言わない。 (消極的反応)
 (B) 「何でもいいでしょう。あんたに関係ないから邪魔しないでよ！」と言う。 (攻撃的反応)
 (C) 作業を中断し、何をしているか相手に説明する。 (主張的反応)
- 26) ○○ちゃん(君)は、道路の向こう側に知っている子を見かけ、話しかけたいと思っています。こういう場合、普通、○○ちゃん(君)は、
 (A) 「こっちに来て！」と相手呼びつける。 (攻撃的反応)
 (B) その子の所に歩いて近づき、会釈をしてから話し出す。 (主張的反応)
 (C) その子に対して、何も言わない。 (消極的反応)
- 27) ○○ちゃん(君)は、それまで会ったことのない子に「こんにちは！」と言われたとします。こういう場合、普通、○○ちゃん(君)は、
 (A) 「あんたなんか知らないわよ、あっちへ行って！」と言う。 (攻撃的反応)
 (B) 何も言わない。 (消極的反応)
 (C) 「こんにちは！」と言い、「どなたですか？」と尋ねる。 (主張的反応)

【感情・共感6項目】

- (7) ○○ちゃん(君)は、誰か他の子が腹を立てているのに気づいたとします。こういう場合、普通、○○ちゃん(君)は、
- (A) 「どうして怒っているの?」と聞く。(主張的反応)
 (B) 何も言わず、その子を一人にしておく。(消極的反応)
 (C) よく腹を立てるやつだとバカにする。(攻撃的反応)
- (8) ○○ちゃん(君)が腹を立てています。誰かが「君は怒っているみたいだね。」と言ったとします。こういう場合、普通、○○ちゃん(君)は、
- (A) 何も言わずに無視する。(消極的反応)
 (B) 「うん、そうなんだよ。」と言って怒っている理由を話す。(主張的反応)
 (C) 「放っといてくれ。君に関係ないだろう。」と言う。(攻撃的反応)
- (9) 誰かが花瓶を割りました。そしてある子がそれを○○ちゃん(君)のせいにしたとします。こういう場合、普通、○○ちゃん(君)は、
- (A) 「何言っているのよ!バカ!」と相手に反発する。(攻撃的反応)
 (B) 「私が割ったのではありません。誰か他の子が割ったのです。」と言う。(主張的反応)
 (C) 責めを負う。または、何も言わない。(消極的反応)
- (10) ○○ちゃん(君)は誰かがつまずいて転ぶのを見たとします。こういう場合、普通○○ちゃん(君)は、
- (A) ドジなやつだと指さして笑う。(攻撃的反応)
 (B) 「大丈夫?痛くなかった?」と聞く。(主張的反応)
 (C) 何もしないし、何も言わない。(消極的反応)
- (11) ○○ちゃん(君)は、本棚で頭を打ち、ちょっと怪我をしたとします。誰かが「大丈夫ですか?」と言ったとします。こういう場合、普通、○○ちゃん(君)は、
- (A) 「痛いときにうるさいわね。あんたの知ったことじゃないでしょ。放っといて。」と言う。(攻撃的反応)
 (B) 何も言わず、無視する。(消極的反応)
 (C) 「ありがとう、ちょっと痛いけど大丈夫です。」と言う。(主張的反応)
- (12) ○○ちゃん(君)が花瓶を割りました。そのため、誰かが自分と間違えられて責められているとします。こういう場合、普通、○○ちゃん(君)は、
- (A) 何も言わず、だまって見ている。(消極的反応)
 (B) 「あの子が割ったんだ。」と誰かのせいにしてしまう。(攻撃的反応)
 (C) 「私が割りました。」と言う。(主張的反応)